

「内村鑑三：不敬事件と妻の死」

詩篇 88 篇 19 節

聖学院大学 欧米文化学科

大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科特任教授 関根清三

奨励の課題は、ここに集(つど)うた皆様と御一緒に、改めてキリスト教の核心は何なのかに耳を傾けることだと思います。そのような課題を果たすためには、具体的なクリスチャンの例、しかも限られた時間ですから、何かその人の典型的なエピソードをあげるのが、一番わかりやすいのではないのでしょうか。それで今日は、万延二年から昭和五年まで(つまり、1861 年から 1930 年まで)生きたクリスチャンで、伝道者であった、内村鑑三にスポットライトを当てたいと思います。内村というと、不敬事件が有名で、これについては高校の教科書で学んだ方も多いことでしょう。しかしその陰に、新妻・加寿子の死という出来事がありました。こちらは余り言及されることがありません。今日はこの両方に焦点を合わせてみたいと思います。

不敬事件については、その場に居合わせた人たちの証言と、事件の二か月後、内村自身がアメリカの友人に書き送った手紙との間に、若干食い違いがありますが、両者を重ね合わせると、大体次のような事件だったと推測されます。

まず内村は、1890 年の九月から第一高等中学校の嘱託教員となりました。明治 23 年ですね。時に内村 29 歳でした。教育勅語が発布されたのはその翌月であり、いわゆる不敬事件が起こったのは翌年、1891 年の1月9日のことでした。その日、一高では教育勅語の捧読式が行われ、教員と生徒は順次教壇に上がって、勅語に記された明治天皇の署名(謂わゆる宸(しん)署(しよ))に敬礼することを求められました。

60 人の教師のなかに、あと二人クリスチャンがいたけれど、彼らは当日欠席した。内村は事前に彼らと話し合ったようですが、礼拝ではなく単なる敬礼だと理解し、武士の子孫らしく降りかかる災難から逃げないで、敢えて式に臨んだ。しかし前日には、学生時代の札幌教会に退会届を出しているのに、迷惑をかけるかもしれぬと、それなりの覚悟をしていたことが推測されます。しかし敬礼のつもりで出席したのに、勅語捧読をした教頭に、「さあ礼拝をしましょう」と言われて、当惑した。しかも登壇は三番目だったので、いくら頭のよい内村でも、考えがまとまらなかった。それで、最敬礼はしなかったけれど、少しだけ頭を下げた。

しかしこの、一人の男の頭の下げ方ひとつで日本中が騒ぐこととなったわけです。

先ずはその場に列席していた千人を超える一高生、約 60 人いた教員、彼らの一部から非難の声があがった。これを新聞が「不敬事件」として取り上げ、内村は日本中から不敬漢、国賊とものしられることとなった。その間、校長が事態の収拾に乗り出し、敬礼は宗教的な礼拝ではないと説いて、敬礼のやり直しを求めた。内村もこの求めに応じ、重い流感にかかっていた内村の代わりに、同僚が代

拝した。

しかしこれでも事件は収まらなかった。自宅への投石、恫喝(どうかつ)等が相次ぎ、仏教各派は機関紙を用いて不敬事件を喧伝した。キリスト教の側も、敬礼のやり直しに応じたことを、強く批判した。そして流感が悪化し意識不明の状態にあるうちに、何者かによって内村は辞職願いを出させられ、二月三日付で依頼解職の身となっていた。

しかも評判を失い、職を失ったばかりか、世間の迫害に耐えて夫の看病に尽くし、憔悴しきった新妻、加寿子を、同じ流感によって喪うのです。職を失った二か月後、4月19日のことでした。

こうして、或る意味では国をあげての国粋主義の血祭りにあげられた内村は、その後の数年の間、国中に「枕するに所なき」困窮の中、各地を放浪しながらミカン箱を机にして筆を取り、『基督信徒の慰』を初めとし、『求安録』、『How I became a Christian』等の名著を、続々と世に送りました。内村はこうして、キリスト教文筆家として再び世に立ったわけです。

以上、不敬事件の経緯について、最近の研究を踏まえて再構成してみました。私が今日、より強いスポットを当てたいのは、その先です。不敬事件で、内村は妻・加寿子の死を経験し、その愛する者の死をめぐって、壮絶なまでの悲嘆と再生の経験をしているのです。しばしば不敬事件だけが取り上げられますが、むしろキリスト教信仰の問題としては、この加寿子の死をめぐる内村の慟哭(どうこく)こそが、ポイントではないかと私は思っております。残った時間、それについて見ていきましょう。

加寿子の死後、二年たって内村の処女作『基督信徒の慰』が刊行され、その第一章が「愛するものゝ失せし時」について語っているのです。ここで内村は妻加寿子の死が彼の魂にもたらした「無限地獄」について告白しています。お読みいただいた旧約聖書の詩篇 88 篇 19 節の「愛する者も友も、あなたはわたしから遠ざけてしまわれました。今、わたしに親しいのは暗闇だけです」の元来の意味は、わたしが重病を病んで死に瀕し、それを厭うた「愛する者も友」も自分から遠ざかったということですが、今日はこれを逆転し、愛する者の死によって内村の経験した「暗闇」を語るものとして引用した次第です。

内村は死について客観的には知っていたつもりだったと申します。そして「若し私の愛するものゝ死ぬ時には、私は其(その)枕辺(まくらべ)に立ち、讚美の歌を唱へ、聖書を朗読し、……潔よく……彼が遠くに逝くことを送らんのみだと」、そのように達観しているつもりだったと申します。しかし、

嗚呼(ああ)、私は死の学理を知り、又心霊上其価値を了(さと)れり、しかし死の冷たき手が私の愛するものゝ身に來り、私の夜ごと熱血を灌(そそ)ぎて捧(ささ)げし祈祷(きとう)をも省みず、私の全心全力を擲(なげう)ち私の命を捨てゝも彼女を救はんとする誠の心をも省みず、死が無慙にも無慈悲にも、私の命より貴きものを、私の手よりモギ取り去るまでは、死の深さ、痛さ、悲さ、苦さを本当には分かっていなかった、と、このように申します〔なお引用は文語で分かりにくいところは、一部口語体に直しています〕。

そして、「愛するもの」と「私自身」との喪失の先には、「神」の喪失という、キリスト者、内村にとって更に深刻な試練が出来(しゅつたい)したと言います。

私は私の愛するものゝ失せしより何か月も祈祷を廢した。祈祷なしには箸(はし)を取るまい、祈祷なしには枕に就くまいと堅く誓ったのに、今は神なき人となり、恨を以て膳に向ひ、涙を以て寢床に就き、

祈らぬ人となってしまったと言うのです。

すなわち、愛する者を救ってほしいという「私の心の底からの願いとして、溢れ出した祈りの聴かれざるより……私は懐疑の悪鬼に襲はれ、信仰の立つべき土台を失ひ、之を地に求めて得ず、之を空に探て当らず、無限の空間、私の身も心も置くべき処なきに至れり。之ぞ真実の無限地獄にして、永遠の刑罰とは是の事を云ふならんと思へり」という、そういう深刻な事態に立ち至ったというのです。そして「哲学の冷めた目をもって死を学び、思考を転ぜんとするも得ず、牧師の慰めも、親友の勧告も、今は怨恨の思いを起すのみにして、私は荒(あら)熊(くま)の如くになり、「愛するものを余に帰せよ」と云ふより外はなきに至れり」と記します。

しかも、「無限地獄」はそれに留まらなかったのです。生前、妻にしてやれなかったことの「後悔」が押し寄せてきて、肺腑(はいふ)を抉(えぐ)るような、次の告白となります。

私は私の失ひしものを思ふ毎に、私をして常に断腸・後悔、殆ど堪ゆる能はざるあり、彼女が世に存せし間、私は彼女の愛に慣れ、時には不興を以て彼女の微笑に報いかなかったか。

彼女の真意を解せずして、彼女の私に対する苦慮を増加し、時には彼女を叱責し、甚しきに至りては、彼女の病中、私の援助を乞ふに当たって、荒っぽい言葉をもって、彼女の頼みに応ぜざりし事があつたではないか。——仮令(たとい)数か月にわたる看護の爲め、私自身の身も心も疲れ果てていたにせよ、これは取り返しがつかないことだ——彼女は渾(すべ)てのことに柔和に、渾(すべ)てのことに忠実だったのに、私の方は幾度か冷酷で不実ではなかったか。之を思へば、私は地に耻(は)ぢ天に耻ぢ、そして今や報ゆべき彼女は失せ、赦しを乞ふべき、その人がこの地上になく、私は悔ひ能はざるの後悔に困(くるし)められ、「無限地獄」の火の中に、我れと我身を責め立てたり。

加寿子夫人については、あまり資料は残っておりません。満二〇歳で八歳年上の鑑三に嫁ぎ、一年半後には不敬事件に巻き込まれ、事件後三か月、その短い生涯を閉じているのです。二年足らずの結婚生活であり、満二二歳となったばかりでの逝去でした。

その二年前、鑑三がアメリカの友人たちに結婚を報告した手紙では、「彼女の名前は Kaz であり、Kanzo minus no です」と紹介しているように、ノーと言わない従順な女性だったようです。更には、大学は出ておらず、知的でもないし、クリスチャンですらないけれど、家事に優れ、夫を立てる女性だと、のろけています。そして自分が信仰について教えることに喜んで耳を傾けている、とも書いている。亡くなる五日前、病床にあつて、受洗しています。

この愛妻への罪責の念に耐えかねて、「無限地獄」に落ちた鑑三は、しかしその果てに、妻の墓前で、ある声を聴くこととなります。

一日、私は彼女の墓に至り、塵を払ひ花を手向け、高きものに祈らんとするや、細き声あり、——天よりの声か、彼女の声か、私は知らず——私に語って曰く、

「汝何故に、汝の愛するものゝ爲めに泣くや、汝なほ彼女に報ゆるの時をも機会をも有せり、彼女の汝に尽せしは、汝より報を得んが爲めにあらず、汝をして内に顧みざらしめ、汝の全心全力を以て、汝の神と国とに尽くさしめんが爲めなり。汝若し我に報ひんとならば、此(この)国・此民に事へよ。かの、貧に迫められて身を耻辱(ちじよく)の中に沈め、娼婦となつた、可憐の少女は我なり、我に報ひんとならば、彼女を救へ。かの、我の如く早く父母に別れ、憂苦頼るべきなき小児は我なり。汝、彼を慰むる

は、我を慰むるなり。汝の悲歎後悔は無益なり。早く汝の家に帰り、心と思いを磨き、信仰に進み、愛と善との業を為し、その後、死んで聖霊の王国に来る時は、たくさんの成果を以て、我が主なる神と、我とを、悦(よろこ)ばせよ」

——そういう声を、内村は亡き妻の墓前で聴いて、ここに初めて無限地獄から脱し、蘇生(そせい)した、生き返ったというのであります。

ここにキリスト教信仰の一つの典型があるように思います。キリスト教は罪と赦しの宗教です。しかし罪ということはなかなか分からないかも知れない。特に若い方たちには分かりにくいのではないのでしょうか。しかし内村が赤裸々に告白してくれたように、人に対して不機嫌な顔をして傷つけたり、苦しんでいる人が助けを求めても無視したり、それが思い返してみれば、取り返しのつかない罪ではないか。

しかしそれを赦してくださる方がおられる。それは神なのか、若くして亡くなった愛する妻なのか、内村にも分かりません。しかし罪なる人を赦し、そして赦された罪人がそれに発奮して生を全うすることを得させるような、そういう私を超えた赦しの力というものが、確かに存在する。

キリスト教はそういう罪と赦しを指し示す宗教だということを、この内村鑑三と、若くして亡くなった妻、加寿子さんの挿話は、我々に語ってやまないのではないのでしょうか。

短くお祈りをいたします。

神様、今日は一世紀以上前、この国でキリスト教の信仰に入り、国中からの迫害を受け、しかしその絶望から癒えて信仰に立ち帰った一人の男と、その愛した亡き妻の歴史に思いを馳せる機会を与えられたことに感謝いたします。ここに、多くの人が薄々感じてはいても隠している、罪としか名付けようのない心の一隅と、それに対する、貴方の愛に満ちた、赦しの意志とを示されたことに感謝いたします。その赦しを示されて、私どもも発奮し、今ここに為すべき務めを果たしていくことができますよう、願いたてまつります。この感謝と願いをイエス・キリストの御名を通して、御前にお献げいたします。

アーメン。

2018年5月16日 聖学院大学 全学礼拝